

串間市文化財調査報告書第20集

市内遺跡発掘調査報告書

2000

宮崎県串間市教育委員会

序

串間市内には各種各時代の遺跡・埋蔵文化財が数多く点在しています。串間市教育委員会ではこれらの文化財を先人の残してくれた貴重な遺産と捉え、その保護・活用に努めてきているところですが、各種の開発事業・造成工事等が埋蔵文化財に与える影響は大きく、文化財保護と各種事業との調整が慢性的な課題となっています。このような状況の中、当教育委員会では各種事業が市内に点在する埋蔵文化財に影響を与えることが危惧される場合には事前の試掘調査・確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無・範囲・性格等を把握して文化財保護のための協議資料としています。

本年度は、携帯電話無線基地局建設計画に伴う大字奈留所在の堂園遺跡の確認調査をはじめとした数地点における調査を行い、その成果を当報告書として刊行することとなりました。当報告書が今後の文化財保護への理解に役立つとともに、生涯学習・学校教育等の場において広く活用されれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたってご協力いただきました関係諸機関並びに市民の皆様に対して、心より感謝申し上げます。

串間市教育委員会

教育長 岩下斌彦

例　言

1. 本書は、宮崎県串間市教育委員会が国県の補助を得て平成11年度に実施した市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、市内に所在する周知の遺跡及び埋蔵文化財が包藏する可能性のある地点の内、大字奈留字西ノ園所在の堂園遺跡ほか5地点について試掘調査・確認調査を実施した。
3. 発掘調査は、串間市教育委員会が主体となり、同主事宮田浩二が担当した。
4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 串間市教育委員会

教育長 岩下斌彦

生涯学習課長 山下泰文

生涯学習課長補佐 潤敏郎

文化振興係長 川上哲二（調整・庶務担当）

主事 宮田浩二（調査・執筆・編集担当）

調査指導 宮崎県教育委員会文化課

5. 遺跡・調査地点の名称は小字ないし通称による。
6. 出土した遺物は串間市教育委員会で保管している。

目 次

本文目次	頁
第Ⅰ章 上ノ原地点の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査地点の位置と環境 ······	1
第3節 調査の内容 ······	1
第Ⅱ章 堂園遺跡の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	3
第2節 調査地点の位置と環境 ······	3
第3節 調査の内容 ······	3
第Ⅲ章 別府原遺跡の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	5
第2節 調査地点の位置と環境 ······	5
第3節 調査の内容 ······	5
第Ⅳ章 吾社遺跡の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	7
第2節 調査地点の位置と環境 ······	7
第3節 調査の内容 ······	7~8
第Ⅴ章 別府木遺跡の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	9
第2節 調査地点の位置と環境 ······	9
第3節 調査の内容 ······	9~10
第Ⅵ章 中島地点の調査	
第1節 調査に至る経緯 ······	12
第2節 調査地点の位置と環境 ······	12
第3節 調査の内容 ······	12
結 び ······	14
報告書抄録 ······	15~16
挿図目次	
第1図 上ノ原地点位置図 ······	1
第2図 上ノ原地点概要図 ······	1
第3図 上ノ原地点基本土層図 ······	2
第4図 堂園遺跡位置図 ······	3
第5図 堂園遺跡概要図 ······	3
第6図 堂園遺跡基本土層図 ······	4
第7図 別府原遺跡位置図 ······	5

第8図	別府原遺跡概要図	5
第9図	別府原遺跡基本上層図	6
第10図	吾社遺跡位置図	7
第11図	吾社遺跡概要図	7
第12図	吾社遺跡基本上層図	8
第13図	別府木遺跡位置図	9
第14図	別府木遺跡概要図	9
第15図	別府木遺跡基本上層図	10
第16図	中島地点位置図	12
第17図	中島地点概要図	12

図版目次

図版1	上ノ原地点写真	2
図版2	堂闇遺跡写真	4
図版3	別府原遺跡写真	6
図版4	吾社遺跡写真	8
図版5	別府木遺跡写真	11
図版6	中島地点写真	13

第Ⅰ章 上ノ原地点の調査

第1節 調査に至る経緯

上ノ原地点の調査は携帯電話無線基地局の建設計画に起因する。平成11年4月上旬、業者が来庁し、計画地における文化財の取扱についての相談を受ける。市教育委員会では踏査の上、試掘調査が必要であることを回答。後、正式に照会文書を受けて試掘調査に着手。調査は平成11年5月20日に実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

調査地点は、串間市大字串間字上ノ原348番地5号である。当地は、大東地区から北方地区にかけて展開する広大な大東原台地の南端（標高約30m）に当たり、福島川を挟んだ南北方向に中世山城の櫛間城跡を望む。調査地点周辺は過去に圃場整備等で地下げされてい るが、当地は山林として残されていた。



第1図 上ノ原地点位置図 (1/25,000)

第3節 調査の内容

調査対象面積は25m²であるが、全面に杉が植林してあり、これを避けるように小規模のトレーナー（1m×2m）を南北長軸に2本設定して調査を行った。当地における土層の状況は第3図のとおりで、薩摩火山灰直下ないしAT層上位までを確認しているが旧地形には傾きが見られ、アカホヤ下層までが削平を受けている。1号トレーナーで黒曜石片（姫島産？）2号トレーナーで土器小片3点が出土したが、いずれも明瞭な文化層の存在を示すものではなかった。



第2図 上ノ原地点概要図 (1/5,000)

I	I 層：表土（黒色腐葉土）、厚さ約30cm
II	II 層：ゆるい黒色土、厚さ30~50cm
III	III 層：薩摩火山灰層、厚さ約5cm
IV	IV 層：暗褐色土、厚さ約20cm
V	V 層：AT層

第3図 上ノ原地点基本土層図

図版1 上ノ原地点写真



調査地点遠景



1号トレンチ



2号トレンチ

第Ⅱ章 堂園遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

堂園遺跡の調査は携帯電話無線基地局の建設計画に起因する。平成11年10月中旬、業者より計画地における文化財有無の照会があった。当地は周知の遺跡であったために市教育委員会では踏査の上、確認調査が必要であることを回答。協議の結果、確認調査を施すこととなった。調査は平成11年12月1日から12月3日にかけて実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

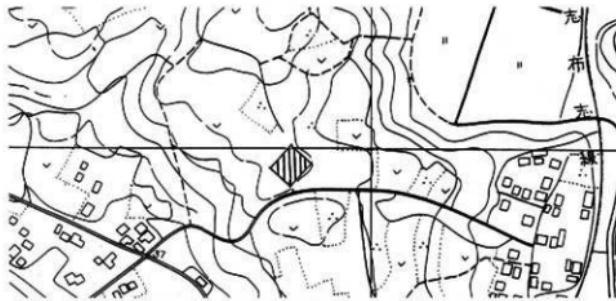
調査地点は、串間市大字奈留字西ノ園4020番地1及び4021番地1に位置する。当地は福島川の支流である大矢取川と奈留川に挟まれた標高約80mの山稜で、調査地点の周辺は地下げされて畠地として利用されているが、調査地点は周辺より2mほど高く、杉の植林地として残存する。ここより比高差約20m下段の兩河川合流地点付近には縄文草創期の遺物を包蔵する西ノ園遺跡、北東方向の山間部には縄文早期を中心とする奈留地区遺跡が位置する。



第4図 堂園遺跡位置図(1/25,000)

第3節 調査の内容

調査は、対象面積300m²にトレーナー（1m×3m標準）を4本設定して行った。当地の現況は平坦地であるが、南西側に設定したトレーナーではアカホヤ下層までが、北東寄りのトレーナーではアカホヤ中位までが削平を受けるといった状況で、いずれにおいてもアカホヤ以降の土層は消滅していた。これ以下の土層は割と残存しているが、旧地形は若干北東方向へ傾斜しており、部分的に小面積の平坦面が見られるといった状況で、遺物の出土は見られなかったが、平坦面を呈する部分に設定したトレーナーでは集石遺構が検出された。

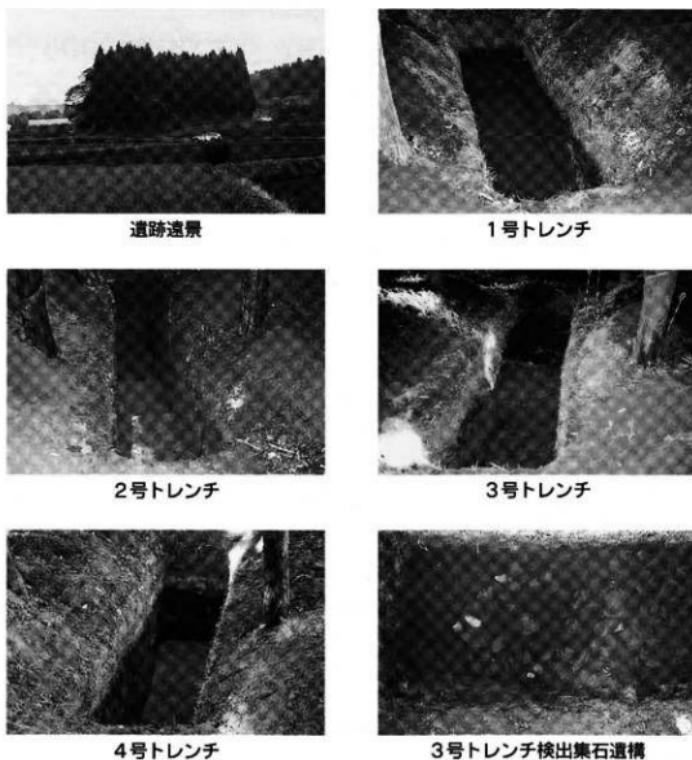


第5図 堂園遺跡概要図(1/5,000)

I	I層：表土、厚さ約40cm
II	II層：アカホヤ、厚さ最大20cm
III	III層：黒褐色土、厚さ約20cm
IV	IV層：暗褐色土、厚さ約20cm
V	V層：薩摩火山灰層、厚さ約15cm
VI	VI層：暗褐色土、厚さ約40cm

第6図 堂園遺跡基本土層図

図版2 堂園遺跡写真



第Ⅲ章 別府原遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

別府原遺跡の調査は携帯電話無線基地局の建設設計に起因する。平成11年11月下旬、業者より計画地における文化財有無の照会があった。当地は周知の遺跡であったために市教育委員会では踏査の上、確認調査が必要であることを回答。協議の結果、確認調査を施すこととなった。調査は平成11年12月8日に実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

調査地点は、串間市大字本城字大坪6347番地5である。当地は中園川と黒仁田川が合流して本城川となる付近の標高約60mの山稜上の平坦地で、南西方向に志布志湾を望む環境にある。堂闕遺跡は下段（比高差約5m）の平坦面で古墳時代の遺物を含むことから周知の遺跡としてきた。河川を挟んだ対岸には縄文早期の上篠原遺跡や縄文後期の上中園遺跡・道場遺跡が所在し、周辺は遺跡の密集する地域となっている。



第7図 別府原遺跡位置図 (1/25,000)

第3節 調査の内容

調査対象面積は100m²で、ここにトレンチ（1m×3m）2本を設定して調査を実施した。現況は平坦な荒蕪地であるが、トレンチでの土層及び周辺の地形から判断すると緩やかな斜面を削平して平坦地としたようである。2本のトレンチではいずれも表土の下層は褐色土で、この層に縄文早期に相当するものと思われる組織痕土器、貝殻文土器が含まれるが、当層は斜面を平坦地とする際に、調査地後方から押された土であるとの印象を受けた。3層はシラスとなり、結果として明瞭な包含層は存在しなかった。



第8図 別府原遺跡概要図 (1/5,000)

I	I 層：表土、厚さ約30~40cm
II	II 層：褐色土、厚さ約40~50cm
III	III 層：シラス

第9図 別府原遺跡基本土層図

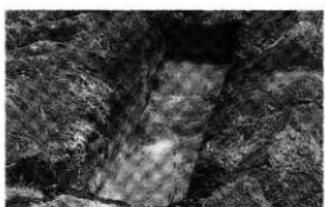
図版3 別府原遺跡写真



遠跡遠景



1号トレンチ



2号トレンチ

第IV章 吾社遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

吾社遺跡の調査は携帯電話無線基地局の建設計画に起因する。平成11年12月上旬、業者より計画地における文化財有無の照会があった。当地は周知の遺跡であったために市教育委員会では踏査の上、確認調査が必要であることを回答。協議の結果、確認調査を施すこととなった。調査は平成11年12月13日から12月16日にかけてに実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

調査地点は、串間市大字本城字吾社7771番地である。当地は本城川の右岸に形成された標高約40mの台地であるが、本城川方向へ若干傾斜する地形を呈している。本城川中流域から下流域にかけては右岸台地上に縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く点在し第III章の別府原遺跡もさほど遠くない距離に位置する。吾社遺跡の近隣でも過去の造成の際に多くの土器等が発見された事例があったようである。



第10図 吾社遺跡位置図 (1/25,000)

第3節 調査の内容

調査対象面積は約400m²で、ここにトレーナー（1m×3m標準）6本を設定して調査を実施した。現況は一部にテラス状の平坦面を有する緩斜面の荒蕪地で、6本のトレーナー中、5本を等高線に直行して設定しているが、おむね旧地形も現況に近い状況であった。各トレーナーとも土層の残存状況は良いものの遺物の出土は見られなかったが、調査地南東隅の平坦面に設定したトレーナーで竪穴式住居跡プランが検出され、埋土中からは土師器が出土している。住居跡は隅丸で北西から南東長軸の長方形ないし方形を呈するものと思われる。調査地の南側は市道を挟んで畑地、東側は中学校の敷地として地下げされているが、住居跡の検



第11図 吾社遺跡概要図 (1/5,000)

出された平坦面と畠地はほぼ同じ高さで、遺跡の主たる部分は畠地方面に残存するか中学校敷地内にあったものと思われる。

I	I 層：表土、厚さ約10~20cm
II	II 層：擾乱土（北部のみ）
III	III 層：御池ボラを含む黒色土、厚さ約20~30cm
IV	IV 層：アカホヤ、厚さ50cm
V	V 層：褐色土、厚さ50cm
VI	VI 層：黒色土、厚さ20cm
VII	VII 層：薩摩火山灰を含む暗褐色土、厚さ15cm
VIII	VIII 層：黒色土

第12図 吾社遺跡基本土層図

図版4 吾社遺跡写真



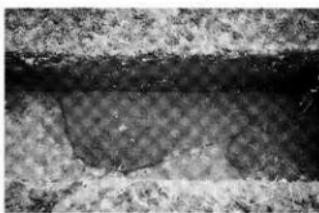
遺跡遠景



1号トレンチ



3号トレンチ



2号トレンチ検出住居跡プラン

第V章 別府木遺跡の調査

第1節 調査に至る経緯

別府木遺跡の調査は、耕作土入れ替えのためのいわゆる「天地返し」に起因する。遺跡を含む善田原台地は串間市内において遺跡の集中する屈指の台地であるが、その面積のほとんどは畑地として活用されており、個人による天地返しが時折行われている。今回は個人よりの事前の情報を受けて試掘調査を行ったものである。調査は平成12年1月17日から1月24日にかけて実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

調査地点は、串間市大字西方字別府木に所在し、善田原台地の西側縁辺部にあたる。当台地は福島地区を流れる福島川と善田川に挟まれるように形成され、志布志湾付近まで展開する標高約17mの広大なシラス台地であるが、昭和62年から平成元年にかけて弥生時代・古墳時代の唐人町遺跡が、平成2年には崩先地下式横穴群が県教育委員会によって発掘調査され、また、墳丘を消失しているが円墳が存在したことなど、古墳時代を中心とした遺跡が点在する地域となっている。



第13図 別府木遺跡位置図 (1/25,000)

第3節 調査の内容

調査は、3筆の畑地（対象面積計約4,000m²）に10本のトレント（1m×3m標準）を設定して実施した。まず、最も標高の高い2,000mほどの畑地に北東から南西方向長軸のトレントを東寄りと西寄りにそれぞれ3本ずつ縦列させて設定したが、東寄りのトレントでは御池ボラ以下の旧地形が東方向へ急激に下り、西寄りのトレントでは薩摩火山灰直上層までが削平を受けていた。畑地のすぐ西側は比高差約15mの水田地帯へと急激な落差を見せており、丘陵状の地形を削平したか、旧地形が激しくうねっているものと思われる。東



第14図 別府木遺跡概要図 (1/5,000)

寄りのトレンチでは各時代の遺物が出土したが文化層を明分化するには至らなかった。これに対して西寄りのトレンチでは薩摩火山灰直下の暗褐色層で小規模ながら集石遺構2基が検出され、隆帶文土器1点、無文土器数点が出土している。集石遺構のうち1基は長径(東西50cm)、短径(南北40cm)で、拳大以下の偏平な碟で構成され、碟には赤変や破碎が認められる。もう1基は径(南北50cm)で、トレンチの西外に展開し、拳大以下の偏平碟で構成され、赤変は認められるが破碎度は低いというものであった。隆帶文土器は器面に太めの隆帶を貼り付け、指による圧痕文を施したものである。前述のように調査地の旧地形には凹凸が見られるが、縄文草創期に相当する平坦面がわずかに残存するようである。なお、約2m下段の畠地2筆に設定したトレンチでは若干量の各時代の遺物を含むものの旧地形は西側の水田へ向けて傾斜しており、文化層を明瞭にすることはできなかった。

①		
I	I層：表土、厚さ30cm	
II	II層：黒色土、厚さ30cm	
III	III層：褐色土、厚さ20cm	
IV	IV層：黒色土、厚さ70cm	
V	V層：御池ボラを含む黒色土、厚さ60cm	
VI	VI層：黒色土、厚さ20cm	
VII	VII層：アカホヤ	
②		
I	I層：表土、厚さ30cm	
II	II層：薩摩火山灰を含む暗褐色土、厚さ30cm	
III	III層：暗褐色土	
③		
I	I層：表土、厚さ40cm	※①は最も標高の高い畠地 東寄りのトレンチ土層。
II	II層：黒色土、厚さ30cm	②は同地西寄りのトレンチ土層。
III	III層：褐色土、厚さ30cm	③は一段低い畠地のトレンチ土層
IV	IV層：黒色土、厚さ50cm	
V	V層：御池ボラ厚さ5~10cm	※※②のIII層が集石遺構検出、 隆帶文土器出土層。
VI	VI層：アカホヤ	

第15図 別府木遺跡基本土層図

図版5 別府木道跡写真



遺跡遠景



1号トレンチ



2号トレンチ



3号トレンチ



4号トレンチ



5号トレンチ



5号トレンチ検出集石遺構



5号トレンチ出土隆帯文土器

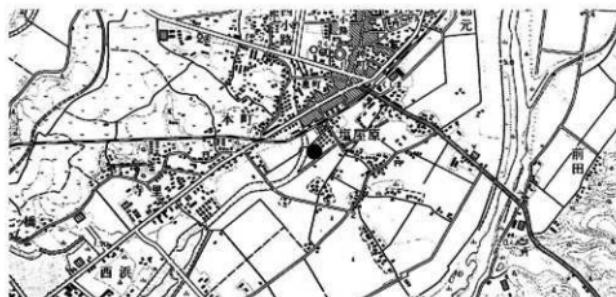
第VI章 中島地点の調査

第1節 調査に至る経緯

中島地点の調査は、串間市による下水道終末処理場建設設計画に起因する。同施設の建設は都市計画課を主管課として平成12年度に計画されており、11年度の市教育委員会による各課への事業照会において把握されたため、踏査を実施、遺物の散布が認められたことにより協議した結果、試掘調査を施すこととなった。調査は平成12年1月25日から1月31日にかけて実施した。

第2節 調査地点の位置と環境

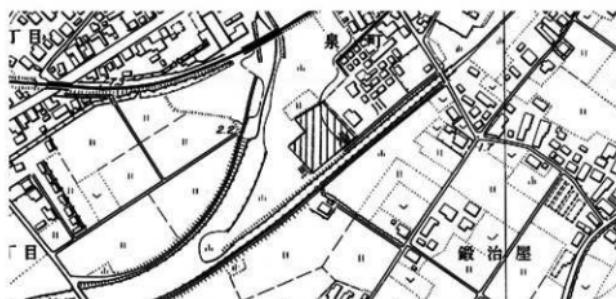
調査地点は串間市大字西方字中島に所在する。当地は市街地を流れる小河川の天神川と馬場川に挟まれ、合流地点に程近い標高約2mの平坦な低地である。周辺の遺跡としては馬場川を挟んだ東側に弥生～古墳時代の遺物が散布する紺屋園遺跡が所在する。



第16図 中島地点位置図 (1/25,000)

第3節 調査の内容

調査対象面積は約3,000m²で、ここに11本のトレンチ（2m×2m標準）を設定して調査を実施した。いずれのトレンチにおいても約20cmの表土（耕作土）の下層には造成土が堆積しており、過去において数回の客土がなされたようである。客土は厚い場合には1mに及ぶ部分も見られたが、おむね40～50cmで止まり、以下は灰褐色の硬質層であった。結果として遺物は表土及び造成土中のみの出土であった。



第17図 中島地点概要図 (1/5,000)

図版6 中島地点写真



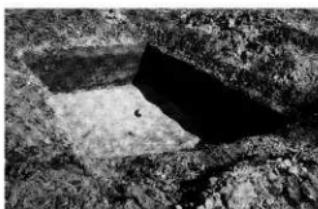
調査地点近景



1号トレンチ



3号トレンチ



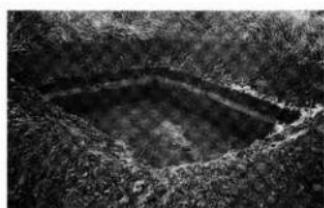
4号トレンチ



7号トレンチ



9号トレンチ



11号トレンチ

結 び

今年度の調査は 6 地点について実施したが、この内の上ノ原地点、堂園遺跡、別府原遺跡吾社遺跡の 4 地点までが携帯電話用鉄塔建設計画（2 社）に伴うものである。いずれにおいても調査対象面積はさほど広くはないものの、鉄塔建設が高台の平地を適地とする性格上、埋蔵文化財に影響を与えることが危惧されるケースが多く、また、同事業は串間市内において年々増加してきており、今後ますます文化財保護について留意すべき事業となっている。

上ノ原地点と別府原遺跡では明確な遺物包含層は存在せず、堂園遺跡については集石遺構が検出されたが遺物を伴わないなど、遺跡として認めがたい状況であったために調査後は慎重工事を通知した。吾社遺跡では一部で堅穴式住居跡プランが検出されたが、試掘調査の結果に基づくその後の協議で、この部分については現状保存されることとなった。天地返し計画を原図として調査した別府木遺跡は、小面積のみの残存状況ではあるものの縄文時代草創期の遺構・遺物が発見され、思わぬ成果を挙げることができた。ちなみに同時期の遺物が確認されたのは市内では 4 例目である。当地の取り扱いについては今後、地権者と十分協議したい。中島地点については遺跡とは認められなかった。

近年の串間市においては、景気の冷え込みの影響で公共・民間ともに大規模な開発行為等は低迷しているが、今年度のような事業は引き続き発生することが予測される。今後とも当市内遺跡発掘調査事業において留意したい。

報告書抄録

フリガナ	シナイイセキ
書名	市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	串間市文化財調査報告書
シリーズ番号	第20集
編集者名	宮田浩二
発行機関	串間市教育委員会
所在地	宮崎県串間市大字西方6524-58
発行年月日	平成12年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ケンハラ 上ノ原遺跡	クシマ ケンハラ 串間市大字串間 字上ノ原	31° 29' 00" 付近	131° 14' 40" 付近	19990520	6m ²	携帯電話 鉄塔建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
散布地						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
トツツノ 堂園遺跡	クシマ ナカ 串間市大字奈留 ニシノツノ 字西ノ園	31° 40' 00" 付近	131° 15' 00" 付近	19991201 19991203	12m ²	携帯電話 鉄塔建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
散布地	縄文早期	集石遺構				
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ヘーフハル 別府原遺跡	クシマ オンシヨウ 串間市大字本城 ヘーフハル 字別府原	31° 25' 40" 付近	131° 16' 40" 付近	19991208	6m ²	携帯電話 鉄塔建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
散布地	縄文早期			組織痕・貝殻文土器		

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ゴシヤ 吾社遺跡	クシマ ホンジヨウ 串間市大字本城 ゴシヤ 字吾社	31° 26' 00" 付近	131° 15' 50" 付近	19991213 19991216	18m ²	携帯電話 鉄塔建設
種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
散布地	古墳時代	住居跡		土師器		
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ベッフノキ 別府木地点	クシマ ニシカタ 串間市大字西方 ベッフノキ 字別府木	31° 27' 30" 付近	131° 12' 50" 付近	20000117 20000124	30m ²	天地返し
種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
散布地	绳文草創期・古墳時代	集石構造		隆帶文土器・土師器		
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ナカシマ 中島地点	クシマ ニシカタ 串間市大字西方 ナカシマ 字中島	31° 27' 20" 付近	131° 13' 50" 付近	20000125 20000131	44m ²	下水道終 末処理場 建設
種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
散布地						

串間市文化財調査報告書第20集

市内遺跡発掘調査報告書

2000年3月

発行 宮崎県串間市教育委員会

印刷 株式会社 長崎印刷